

C—6 山形県大石田町農家における住み方について（第3報）

東北大工学部	佐々木嘉彦
山形大教育学部	長岡 佑
山形大教育学部	金子 幸子

1. 前回までは住宅の面積と間取型および住み方についてのべたが、今回は前報にひきつづき、(1)敷地内建物配置と空間確保のための雪囲い、(2)道路と建物、建物と建物との間のアプローチ、(3)室空間の構成、(4)外壁の構成について検討した。

2. 調査方法は第1報と同様である。

3. (1)住宅の外形は90%が東西に長い矢形で、道路の東、西側に位置しており、南面にある出入口を $2\text{m}^2\sim 4\text{m}^2$ 張り出してオダレで囲ったり、(これを「あまや」という)又住宅の軒下にもオダレを張って空間を確保しているのが多い。(2)付属建物所有戸数は60%で、他は住宅に作業場や物置きが接続しており、家畜飼育農家の全部が内畜舎である。住宅は道路に近接して南面し、冬季は道路より住宅の南側を通過して「あまや」に至るまでの道が唯一の通路である。付属建物は住宅の東、西又は南側にあるが、両者間に屋根をかけ、雪囲いをして連絡を便利にしている通路が20%あった。(3)床は板張りか、ござ敷きであるが、冬季間は菅畳を敷く。間仕切りはほとんどが障子や板戸で壁は僅少である。天井はザシキや台所の他は棹縁天井が多い。(4)外壁は大部分が土壁で開口部は南面に多い。採光はオダレの上部即ちガラス窓30cm程の部分を切りとったり、又高さ40cmの欄間窓を多く利用している。以上これらは、経営階層別の変化が見られないという点で、積雪寒冷地としての特徴といえよう。